

期 昭和五十八年十一月十五日～十二月三日
於 図書館三階閲覧室（本館）

山中常盤 複製絵巻

「山中常盤」の物語の概略は、鞍馬山から秘かに脱出した牛若丸が、奥州へ下る。母である常盤御前は、わが子の行方が、ようとしてわからず、清水寺に願をかける。すると、奥州からの商人によって、牛若丸の手紙が、届けられ、翌春、常盤御前は、侍従一人を伴って、奥州への旅に出る。しかし、美濃国山中の宿で病にたおれ、さらに、常盤の衣服をねらった盗賊に、襲われ、侍従ともども刺殺されてしまう。夢枕によって、そのことを知った牛若丸は、山中の宿で逆に盗賊をおびきよせ、母の仇討をする。一たん奥州に引き返し、ふたたび大軍を率いて、都に上る途中、山中に立ち寄り、母の墓に詣でて供養する。という物語である。この物語を躍動的な筆致で描いたものが「山中常盤絵巻」である。

この「山中常盤絵巻」は、旧津山藩主松平家蔵の一品であったが、昭和三年、ドイツへ海外流出されるところを長谷川巳之吉氏が私財をなげうって、入手したもので、浮世絵の元祖岩佐又兵衛筆の大作といわれる。（この絵巻には、署名落款がないため、又兵衛作であるかどうか、論争がたかかわされたが、現在、又兵衛作として認められている。その当時の事情は、松岡譲著「岩佐又兵衛の今昔―又兵衛論争と発掘の経緯」に詳しい。）

○ 山中常盤 複製絵巻

（別置）

「岩佐又兵衛」筆

巻子本十二巻 三十三・三纏 白黒写真版 東京 第一書房 昭和七年刊 原本「寛永期頃」作 現在 熱海市MOA美術館所蔵

岩佐又兵衛は、天正六年（一五七六）、織田信長の家臣、摂津伊丹城主荒木村重の末子として生まれたが、その年の十月に、父が謀反をおこし、又兵衛二才の時、伊丹城が落城し、一族妻子三十余名が、京六条河原で、さらし首にされるなか、難をのがれ、姓を岩佐に改め、名は勝以と称した。成人し、織田信雄に仕え、その後、元

和二年頃、越前北之庄の松平忠直に仕える。その頃の作ではないかといわれている。後、江戸へ出て、慶安三年（一六五〇）六月二十二日、七十三才で没している。

この岩佐又兵衛の経歴において、又兵衛の幼児体験と母性思慕が、「山中常盤絵巻」制作上、牛若丸と常盤御前との関係にオーバーラップされるといふ指摘が、辻惟雄・信多純一・安岡章太郎の各氏から出されており、興味深いところである。

最近、「絵巻山中常盤」（辻惟雄編 角川書店 昭和五十七年発行）が刊行されており、本館も購入、架蔵している。